



## 『北亞墨利加圖卷』メキシコで二年連続して展示される

### ◆日墨交流の歴史を描いた卷子本

本学図書館が所蔵する『北亞墨利加圖卷』(1844-天保十五年)が、昨年(2023)の9月13日から同26日までメキシコシティのメキシコ国立人類学博物館で開かれた「日墨交流400周年 交流の軌跡展」に出展されました。この展示会への出展は在メキシコ日本大使館からの依頼に基づいて協力したものです。



メキシコ国立人類学博物館で  
1,485cmの巻物が展示された様子



この資料は、まだ鎖国体制が続いていた江戸時代の後半の天保十二(1841)年に、暴風雨に遭遇して漂流した永住(寿)丸の乗組員一行がスペイン船に助けられて、メキシコへ渡った体験を絵に描いて綴ったものです。絵は乗組員で阿波出身の初太郎という人物が、日本へ帰国して儒学者である前川文蔵らの取り調べを受けた時に素描したものを、出直之が筆をとって描きなおしたと考えられ、天保十五(1844)年に絵巻形式の卷子本(縦29×横1,485cm)として世に出されたものです。

この資料と共にメキシコへ赴いた本学の大垣貴志郎教授(京都ラテンアメリカ研究所長)によると、「現地での反響は大きく、本学所蔵の稀観書への関心も高く、報道機関でひろく紹介された」とのことです。

なお、この『北亞墨利加圖卷』は一昨年(2022)の二月にメキシコの連邦下院の北講堂で行われた「日墨交流400周年記念講演会」にも出展されて、同国の方々から好評をばくしたものです。